（大正元年十一月十一日第三種郵便物認可
昭和八年三月廿日發行（毎月一回二十日發行））

正教時報

第二十二巻 第三號

目次

聖歌「生神童貞女や慶べよ」二種
アルハンゲリスキイ作曲スミルノフ作曲……
信仰と不信仰……西海枝靜
死の問題……大澤正
祈禱の眞相……砂澤丙喜治
雜報
海のかなた
教報
永眠者

葬式の嚴肅と壯嚴に驚異を以て注目されし事尠からず、聖歌班には東京の日比、森、古川、星野、福地姉妹、横濱の芝崎、宮階、横須賀の伊比などの諸兄姉、加島、金田、昇曙夢の諸兄があつた。會葬者の重なる人々は海軍將校、下士官で祈禱の始めより終りまで直立不動の姿勢で庭前に整列せられた。最後に棺前に燒香が行はれ記念撮影があつた。かくして告別式は滯りなく午後四時盛大裡に終了した。銀色滴るばかりの造花・色とり〲の生花を以て造られた十字架にて覆はれた、マリヤ姉の棺は用意の靈柩車に移され多數の會葬者に見送られて一路山間にある火葬場に到著した。やがて落ち行く春の日は悲哀の裡に暮れ、一帶の山脈も暗く沈み、村も町も暮色に包まれてしまつた頃荼毘に附せられた。亡姉の遺骨は知人と親近者の手にて小櫃に納められ、夫ゲオルギイ大尉は之を抱き森田、高井、小生の三司祭と同車して自邸に歸つた。マリヤ姉の訃報が遠近に傳はるや永別を惜む弔辭、弔電を寄せた知己、朋友實に百五十名、以て亡姉が如何に内外人に愛せられたかを窺ふに足る。因に埋骨式は七月頃郷里長崎に行はるゝ豫定(奥山報)。

○札幌教會聖歌隊

數年前より次第に組織立つて來た聖歌隊は最近學生會の執心なる協力により更に一段と躍進的な發展を見せて來ました。メンバーの增加、練習の規律ある制統等は凡て青年達の自發的積極的な行動によるものであります。

從來兎もすれば沈滯勝ちな聖歌に、更生の息吹きを與へるものはその根本的再認識であらねばなりません。正教會聖歌に於てこれまで全然閑却されてゐたリヅムを探究し、直譯的な歌詞と無理に結びつけられたメロディを解放し、千遍一律のハーモニーをその倦怠より救ひ出すことが急務でありませう。この見地から當教會聖歌隊は從來の聖歌曲の眞面目を失ふことなく、而もこれを上述の如く各方面から再檢討して、眞に宗教的魅力ある合唱曲とすることに日夜努力致して居ります。現在のメンバーは次の通りです。

顧問ニコン村井道三郎、アンナ岩間清野、指揮者ルカ村井五郎、バス、ロマン笠原、テホン伊藤、ペトル蘆立、エミリアン盛田、モイセイ岩間、アキラ北浦、ルカ平、ニコン村井、テノル　シメオン岩間、ルカ村井、アルト　ウエラ横山、マリナ石井、ユスチン石井、マリヤ猪俣、エレナ木村、アンナ榆金、アンナ岩間、ソプラノ　エカテリナ石井ソヒヤ小田島、アナスタシヤ小田島、ソヒヤ鹽谷、ナデジダ横山、「マトロナ村井。

現在まで完全した聖歌曲をあぐれば次の通りです。

カスタルスキー作聯禱、第八「ヘルビム」、第十「ヘルビム」ボルトニアンスキー作「ヘルビム」、リチフスキー作「ヘルビム」、トルテヤニノフ作「ヘルビム」、チヤイコフスキー作「ヘルビム」(露語)、第二「天に在す」、第二「常に福にして」、第二「親みの捧物」、降誕祭コンツエルト、受難週間の「スタテヤ」及「ネボロチヌイ」等。

一月二十二日の主日には聖歌隊の懇親會が催されました開會の祈禱に次いで、指揮者の挨拶、學生會及女子青年會代表の挨拶、岩間夫人の所感、最後に岩間神父の激勵訓示ありて一同晝食をとりその間各メンバーの一分間所感演[illegible]つた。氣焔あり感謝あり要請があつたが皆何れも誠意を披瀝したのであつた。續いて合唱、獨唱、母校の校歌齊唱等の餘興があつて和氣靄々の裡に散會した。

聖歌練習は毎月第一、第三、第四の日曜祈禱後で午後一時より約一時間であります。併し熱心の餘り思はず規定の時間を歌ひ過ごすことも珍らしくありません。尙ほ毎月一回位は音樂理論の講習を致します。岩間神父の適正なる御指導のもとに私共の聖歌隊はかうして日一日と成長して行くのです。聖歌譜の交換、御高見の拜聽を各教會聖歌隊の皆々樣に切望して止まない次第であります(村井五郎氏報)

○白河教會

傳道者缺員となつてゐるにも拘はらず議友、信徒達は堅固なる信仰を有ち土曜日には祈禱後澁木、吉田、小倉の諸兄代はる代はる聖書を朗讀し會衆平均十五名、日曜日は參會者稍尠く十名位、二月十二日の夜婦人會が催されワシリイ平澤氏祈禱を献じ聖書朗讀、感話をした。無盡會を始め一回の掛金を教會に献ずる成規となし外に毎月一名につき金五拾錢を積立てゝ東京本會に參拜旅行する相談をした。參會者十六名。日曜學校は澁木、平澤、吉田の諸氏の敎授指導によりて生徒は漸次殖え現在五十名以上の生徒がある、生徒は聖歌を練習し聖堂にて唱ふやうになつた。

○高井長司祭の臺灣巡回記

此日高雄より二十六里の恆春を過ぎ更に又三里余ある生蕃地駐在所在勤のイウステン小關兄を訪問する豫定なりし處、生憎季節の大風襲來に遭ひ殊に蕃界は不便なるため一人旅は中止さるゝ方可ならんとの令弟の勸めにより遺憾ながら中止して次回訪問する事とす。豫定を變更し直ちに山懸兄小川兄と偕に自動車にて高雄全市を見物す。同地は人口四萬、州廳の所在地にて基隆に亞ぐ良港なり、防波堤二千百八十九尺、岸壁四百八十間にて一萬噸級の汽船十二隻を港内岸壁に繫留し得ると云ふ。岸壁に裝置されたテルフアー式起重機の操業は港内の一偉觀なり。公園に登りて遥に新裝せる天主堂其他の建築を展望す。兩兄に見送られて午後二時出發臺南に向ひ三時到着す。同地居住の信者宅を

臺　北　敎　會

訪問せしに所在不明にて知る由なく市中を見物して同地を出發す。六時番子田驛に下車し此處より製糖會社の私鐵線に乘換へ八時終點佳里驛に下車す。同地より學里庄駐在所のイオアン氏家兄宅迄五哩余あり、交通機關なく旅館もなくさりとて夜中甘蔗畑の大平野を徒歩するは不可能にて殆んど閉口し、ひと先づ驛長室に入りて相談せしに小生のために幾度か驛長自身電話にて駐在所に紹介せられしも、生憎不通にて先方に通ぜず、驛內の隅にて一夜を明かさんかと決意せしも、驛長の好意にて特別に小生一人のため臺車(トロッコ)を仕立てゝ二人の本島人車夫を付して五哩の途を送られたるは感謝の外なし。驛長の好意を謝しつゝ點火なき臺車に乘せられ不安裡に出發せしが、幸ひ十六夜の明月は物凄く甘蔗の大平野に照り渡り壯觀言語に絕しそぞろに單獨の旅愁をそゝつた。大平野に一軒家の駐在所に居住する氏家兄夫妻は此夜中、時ならぬ轟々たる臺車の音に不安を感ぜれつゝある處に、小生の突然の來訪に驚き且つ喜ばる、時正に十時三十分。直に晚課禱を献じ同兄の痛改を聽き就寢せしはかれこれ一時過ぎ、內地敎會よりの通信にて北門庄の舊居住所に通知を出したるにより、氏家兄は若し小生が北門庄に來訪するならば遠路地理不案內にて難儀すべきを非常に心配されたが、小生三日前新營にて横山兄より偶然に氏家兄の居所を知りしため、北門行を變更

したるは僥倖なりき。

十五日午前氏家兄の領聖後嚴父ペートル兄のパニヒダを行ふ。此地名産の白油(ジヤボン)の美味、今尙は忘るゝ能はず、氏家兄夫妻に見送られ十時出發一時半番子田にて乘換へ、三時喜義に到着す。臺灣銀行內にペートル林兄を訪問す、執務中ゆゑ再會を約して、西門街の露人エゴリチエフ宅を訪問す。六時林兄の來訪を待ち同兄の社宅に行きしに家族は臺北に行かれ不在にて林兄と晚課禱を行ひ同兄の痛改を聽く。

十六日早朝林兄領聖し、同兄に見送られて、九時半臺中に向ひ、午後一時到着、直ちに一信徒を訪問せしに轉居して行先き不明のため警察署に行き聞きただし、青果會社にイリナ和泉姉を訪問す。同地商業學校教諭水山松男兄に電話にて來意を告げ四時停車場にて會合する事とし驛にて和泉姉三名と會談す。和泉姉を伴ひ在留露人ネワオリン氏方を訪問しモレーベンを行ひ其夜宿泊する要なきため夜午前一時迄驛待合所に休憩し水山兄に見送られて出發臺北に向ふ。同地に小生出發前迄數年間居住せしペール結城壯八兄は內地の新敎派經營の孤兒院に勤務のため臺中を引上げらる際正敎會脫會の旨を通知されたるは同兄のため遺憾とする所なり。猶は二十年前小生渡臺の際此地では三十名余の正敎信徒ありて盛會なりしが轉々として居所不明、一名の舊知信徒にも會はざるは殘念なりき。

十七日午前七時臺北に到着す。朝食後松本兄夫妻と共に圓山公園及び臺灣劍潭佛社を見物したる後、小生は臺北驛を出發、樹林驛下車、專賣局にペートル內藤兄を訪問す。內藤兄の案內にて工場內を隈なく見物す、最新式機械、器具の設備と科學の應用にてアミロ法による米酒の製造をなしアミロ法米酒醱酵タンクの如き民營會社にはとても見られざる大規模の裝置に喫驚せり、內藤兄宅に投宿す。

十八日內藤兄に見送られ出發、艋舺に下車して林氏を訪問外三戶の信徒を訪問す。

十九日臺北の白土兄外四戶を訪問す。

二十日當日は松本、山田兩兄の盡力にて午前七時を期して臺北正敎信者の總集會を山田拍採兄宅にて開催する事を信者に通知せられしため、五十名余の信者は早朝より來會し午前七時より大人小兒七名の洗禮を行ひ、廿數名の痛改を聽き、祈禱、領聖、說敎の後、臺灣にて永眠せられし信者のため、パニヒダを行ふ。聖務の終りしは十二時過ぎ、五時間にわたる長き聖務中信者達は熱心、靜肅に祈りを捧げられしは感激の外なかつた。松本夫人其他の婦人等にて用意された午餐に一同滿足し、食後記念の撮影をなし、當地に於てかく多數の正敎信者が盛大なる集會を開催せしことは臺灣布敎後のレコードにて、此機を逸せず當地の信者達は

時々集會を催うして信仰を溫ため、婦人連は聖歌練習に着手したしなど、各自の希望を述べる。尙ほ今年の降誕祭は信者一同集會して盛大に祝ひする事に決め、和氣靄々の裡に散會す。此日臺北居住の露人三名も早朝より來會し、圖らず痛悔領聖して內地信者と交驩せしを無上に喜び居れり。又當地にニコライ村田正義氏と母堂イリナ、ひさ（七十七歲）と云ふ人は仙臺正敎會に於て故笹川長司祭より洗禮を受けられしも二十年前渡臺、其後當地に正敎會なきため信仰冷えイリナ姉は十五年間中風症にて病床に臥し、當時は日蓮宗を信仰し居られしが、予は偶正敎信者たることを聽き直ちに松本兄と偕に訪問したるに、自己の信仰を告白し、ニコライ兄も信仰に目覺めらし臺北信者と共に祈禱會に出席せられしは實に嬉れしく感じたり。

二十一日午前白土姉と偕に宇土姉を訪問し植物園を見物す其後村田兄を訪問しイリナ老婦の爲めに祈禱せしに同姉は淚を流して喜べり。村田夫人に送られて幸野兄宅に行き令息三名、此度領洗され一家の喜悅の裡に晩餐を偕にす。

二十二日午前中信徒を訪問す。午後松本兄と偕に一緒に專賣局に至り宇土兄の案內にて煙草、樟腦、食鹽、阿片の各工場を見物し年收四千三百十七萬の大財源を算するの盛況に驚かさる。此夜宇土兄夫妻より蓬萊閣に招待せられ、松本兄と偕に臺灣一流の料理を饗應せらる。

二十三日白土・松本兩夫人の招待にて臺北より十哩の草山に遊ぶ。七星紗帽等の溪谷の中間にありて、眺望に富み靜養地としての理想鄕、總督府經營の公共浴場などあり、臺北より家族や團體の遊山に來る者多く繁昌を極む。歸途自動車にて北投溫泉にゆき白土姉の知人を訪問す。

二十四日松本兄夫妻に見送られ午前八時臺北驛出發、宜蘭に向ふ、午後三時宜蘭に到着、アキラ細谷兄を訪問し、嚴父イオアン兄四月永眠せられ遺骨埋葬のため母堂アンナ姉は鄕里中新田に歸省中なりと聞き再訪問を約し自動車にて二結に向ひ出發す。午後七時二結製糖所會社にアキラ佐々木兄を訪問せり。

二十五日午前五時佐々木兄夫妻に見送られ出發蘇澳に向ひ七時到着す。八時發の自動車に乘換へ花蓮港に向ふ。蘇澳花蓮港間は每日往復の連絡船あるも風波荒く、非常の難航にて時として花蓮港に着するも上陸不可能にて再び引返す場合ありと聞く總督府は八百萬の巨費を投じて今年四月より陸地道路を開鑿し自動車にて旅客の運輸を開始することゝなりしため、旅行者に取りては非常の便利なり。蘇澳花蓮港間三十一里の臨海道路は懸崖を半トンネル形にぬき直下碧波に臨む。途中東洋第一の壯觀と稱せらるゝギルマルド大斷崖或はタツキリ溪大鐵線橋を渡り途中幾度か膽を冷した。生蕃の住居する村落を通過し六時間餘自動車に搖られつゝ無事花蓮港に到着せり。臺灣銀行に支店長ウェッサリオン佐藤兄を訪問す。案內されて兄の社宅に投宿して晩課禱を献ず。

二十六日午前七時佐藤兄の案內にて自動車にて港內築港工事を見物し、二里餘の吉野村の移民部落を視察す。事務所にて村長及び助役に面會せり。吉野村は明治四十三年の創設にして花蓮港廳下に於ける最初の官營移民村。現在の戶數は二百九十六戶、男子は七百四十九名女子は七百十二名合せて一千四百六十一名、耕地面積一千二百二十三町を有し村落に三名のカトリック信者ありと云ふ、歸途生蕃地部落を見物す。

二十七日醫學士守氏夫妻の案內にて、國立公園候補地大タロコ見物のため、午前八時自動車にて出發す、六里餘の太魯閣橋にて下車し此處より徒步にて登山す。タロコ峽三棧木瓜の三溪谷に屬する一帶の生蕃地で、タイヤル族たるタロコ蕃の蟠居する深山幽谷にて、特にタイヤル族は慓悍獰猛を以て聞え、平地との交涉なく全然原始的生活を營み來たものであるが、今は全く舊風を改め溫良純朴の民と化し道行く內地人に遇へば、丁寧に叩頭し、日本語にて必らず挨拶をなし、何等不安を感ぜず。大小數個所の名物鐵線橋を渡り二里餘を登山、漸く蕃地駐在所に到達す直立五千尺、大理石の大斷崖の偉觀臺灣特有の森林美、指呼の間に雲際に連る中央山脈、孰れも一萬尺を越える高峰にて拘擁し、溪流の響き、タツキリ溪に流失する砂金量數億、脚下に望む際涯なき太平洋の波浪、實に一大驚異的偉容と云ふべきである。之より奥地蕃界に行くには警官の護衛を要するので歸途に就く。太魯閣橋に下り自動車にて六時歸宅せり。花蓮港は人口七千二百を有し市街の狀況は內地氣分濃厚にして築港完成後の將來は年と共に發展すると思ふ。

二十八日佐藤・守兩家に見送られ、午前八時出發蘇澳に向ふ斷崖道路通過の頃より風雨强く暴風不安の裡に難關を經て無事午後二時蘇澳に到着す。直ちに汽車に乘換へ四時二結に下車、佐々木兄方を訪問して晩課禱を行ひ一家の痛改を聽く。

二十九日午前七時領聖後佐々木夫人の案內にて製糖會社工場バガス工場を見物す。

三十日午前八時出發し佐々木兄夫妻は宜蘭まで見送られ細谷兄宅を訪問す。嚴父イオアン兄のためパニヒダを行ひ、五時出發九時半臺北に歸着す。

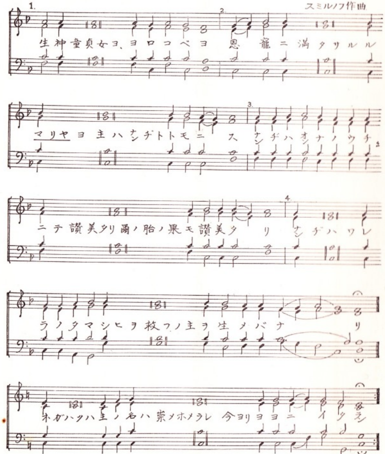
十二月一日市內信徒宅を訪問し白土兄方にて洗禮を望む人々と敎話す。

二日午前六時より白石兄宅にて白石久吉氏の洗禮を行ふ。

三日赤十字社醫早田博士及び市內の信者八戶を歷訪せり。

四日松本兄夫妻の案內にて土人經營の佛敎の尼寺を見物し

No.9. 生神童貞女や慶べよ.



午後二時臺北教會信者、早田博士夫妻其他多數に見送られて出發す。松本兄は態々基隆迄同行せらる感謝の外なし、古山兄方に投宿す。

五日午前古山兄夫妻・松本兄と記念撮影して午後蓬萊丸に乘船す。雨中古山兄夫妻、松本兄、武石兄船室まで見送られて基隆出帆歸途に就く。生憎大暴風雨に遭ひ海上浪高く船體の動搖名狀し難く船客中起床する者なく三晝夜半船暈に惱され辛くも難船を免かれて八日午後四時門司に安着せるを神に感謝せり。上陸して後五日臺灣基隆沖に於て驅逐艦早蕨の沈沒せし事を新聞紙上に知りてひたすら無事に安着せるを祝せり。直ちに小倉松井兄方を訪問し十一日の主日同會に於て公祈禱を行ふ豫定なりしも留守宅に重患者ありとの通知に接し同夜十一時半小倉を出發して九日午前七時歸宅す。

今回の巡廻に際し多年捨てられし臺灣信者の信仰に尠からぬ効果を與へられし事を神に感謝すると共に臺灣各地に於ける信者諸兄姉の親愛と多大の便宜を與へられしに對し深甚の感謝の意を表するものなり。

臺灣信徒の家庭には二十年間牧者なく生活しながら聖像を正面に安置して毅然信仰を保たれたる點は尠からず感銘せり。

歸宅後緩々旅裝を解く暇なく福岡、久留米、小倉に出張して降誕祭祈禱を行ひ一月六日長崎の降誕祭の奉事を終るや否や小倉教會有田氏の淨兒埋葬に出張し、長崎に歸りし後露國人の依頼にて新年祈禱を執行し、再び小倉教會の筑紫ニコライ兄危篤の電報に接して出張、聖傳機密、聖體を授けしに不幸にも同君は十八日永眠せられ三日間滯在して埋葬式を行ひ二十日柳河の埋骨式を終へて歸崎する等、臺灣より歸省後南船北馬寸暇なく巡回記は思はず延引せるを謝す。

永眠者

昭和六年十一月五日盛岡教會マリヤ千葉サト（六十七歲）〇十二月三十一日東京北部教會マリヤ上野ウメ（六十四歲）〇昭和八年二月十三日鎌倉町マリヤ藤尾英子（二十七歲）〇十五日東京四谷教會マリヤ桑島イト〇十八日涌谷教傳教補助ルカ小櫃素行〇二十日宇都宮教會イリナ半田八重子（十七歲）〇二十一日陸中松川教會ニキタ安宅悟（二十六歲）〇二十二日東京南部教會ゴルデイ篠崎榮八（六十八歲）〇二十三日北海道網走教會イオアン山內龜雄。

正誤

二月號廣告下段五四五圓三九は九三に訂正す。